日本剣客伝・五

千葉周作・海音寺潮五郎
沖田総司・永井龍男

海音寺潮五郎（かいおんじ　ちょうごろう）
1901（明治34）年、鹿児島生まれ。
1977（昭和52）年没。

永井龍男（ながい　たつお）
1904（明治37）年、東京生まれ。

日本剣客伝 5　千葉周作・沖田総司

昭和57年6月20日　第1刷発行　　定価380円

著　者　海音寺潮五郎・永井龍男

発行者　初山有恒
印刷製本　凸版印刷株式会社
発行所　朝日新聞社
〒104　東京都中央区築地5-3-2
電話　03(545)0131（代表）
編集＝図書編集室　販売＝出版販売部
振替　東京0-1730

© KAIONJI KINENKAN & TATSUO NAGAI 1982
Printed in Japan 0193-260865-0042

日本剣客伝 5

千葉周作　沖田総司

海音寺潮五郎　永井龍男

朝日新聞社

表紙・扉　伊藤鐵治

目次

千葉周作　海音寺潮五郎
松戸の船闘　9
剣術家の堕落　21
二人の娘　33
若隠居勝五郎　45
羽化　58
女剣士　70
隻手剣　82
剣と女　95
くされ旗本　108
浅利又市良　120
秋山川の敵討　133

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

沖田総司　永井龍男
新選組始末記　155
歳末試衛館　165
火消屋敷　176
大焚火　188
洛西壬生村　199
独行道　211
二軒茶屋の灯　223
盤上盤下　234
ドンドン焼け　245
勝てば官軍　256
この空虚　266
解説（安田　武）　279

日本剣客伝 5

千葉周作（ちばしゅうさく）

海音寺潮五郎

『週刊朝日』昭和四十三年九月十三日号～十一月二十二日号掲載

松戸の船闘

一

昔は下総葛飾郡松戸宿、今は千葉県松戸市、これがこの小説の発端の舞台になるので、書き出す前に行ってみた。

このへんは、戦争前に数度鮒つりに行ったところだ。古利根から亀有、金町あたりを歩いて、渡し舟で江戸川をわたって松戸に行ったことがあるが、その頃のおもかげはまるでない。記憶では、かんかん照りの強い秋の陽の下を、青田の中につづく道をてくてくと歩いたような気がするのだが、まるでかわって、田圃なぞ全然見当らない。すっかり市街化している。江戸川の東京よりの河原はゴルフの練習場が緑の芝生を美しくひろげており、うんと水量が減っている。川の岸はコンクリートの護岸工事が出来、荷足船が三、四艘だけつながれ、鯉つりの人が三人、薄にごりした水にリール竿をつき出していた。

松戸の町もすっかり変っている。以前は川に近い町はずれに、青田の中に数軒の二階屋があり、あれは遊廓だと、同行の友人が教えたが、そんなものはもうどこにもない。戦後の急速な日本経

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

済の発展で、新しい様式の店舗が立ちならび、町の中央をつらぬいている国道六号線には、トラックと乗用車がひっきりなしに走って、いそがしげな町になっている。ところどころに、ごく稀に、昔風なつくりの店舗があるのが、わずかに昔をしのぶよすがであった。

戦前ぼくの行った頃は、松戸の最も衰微していた時期かも知れない。江戸時代には、なかなか栄えた町だったのである。古い書物に、「水陸交通の要衝」とあるが、実際その通りであったのだ。陸は陸前浜街道（今の国道六号線）の宿駅で、土浦、笠間、水戸、磐城平、中村（相馬）、仙台、南部等の諸藩から江戸に出て来る道筋にあたったので、幕府は番所をおいて「松戸、金町の関」と称していた。水は――これは少々長い説明を要する。

江戸川は松戸のへんを流れる時は松戸川ともいうが、これが当時の最も重要な貨物輸送路であった。土浦、笠間、水戸等の諸藩は、江戸藩邸で使用する米、炭、薪、その他の日用物資を、霞が浦から船で積み出し、利根川をさかのぼり、関宿から江戸川に入り、これを下って浦安で江戸湾に出た。中村、仙台、南部諸藩は太平洋岸を南航して銚子で利根川に入り、前者と同じコースで江戸湾に出た。関東内陸の諸藩でも、利根川水運を利用出来るところは、やはり江戸川によって輸送した。たとえば、江州彦根藩は、野州の佐野に飛び領地があったので、ここから日用物資を送った。渡良瀬川を下して利根川に出たのである。だから、これらの諸藩の船、民間需用の貨物の輸送船で、江戸川はおそろしくにぎわい、従って松戸も繁昌したのである。

文化八年六月十九日と、はっきりとわかっている。朝の間はよく晴れて、むせ返るほど暑い日

であったが、昼近い頃から雲がひろがり、強い南風が吹き出し、川には白い波が立って来た。

松戸川をわたった、松戸宿の真向いあたりを小合溜といった。これはうんと古い時代の古利根川の末流で、古利根はここで松戸川と合流していたのだが、江戸中期に中川をうがって古利根の水を荒川に落したので、古利根の末流は細長くうねった池になり、水門によって松戸川につらなるだけとなったのである。

この日、この水門外の松戸川で、朝から釣りをしている男があったが、川が波立って来たので、竿を片づけ、魚籠を引揚げた。

立ち上ったところを見ると、おそろしく大きな男である。つんつるてんの、洗いざらしの浴衣から出ている腕も足も、太く、長く、たくましく、身長は六尺もあろうか。田舎相撲なら優に大関がつとまろう。そのくせ、竹の子笠の下の顔にはまだあどけないような稚さがのこっている。年は十八、九にしかなるまい。

若者は、夏草の斜面をのそのそとのぼって、堤の上に立ったが、ふと下手の方を見ると、おや、というような表情になった。

ひとえの裾を高々とはしおり、たすき・鉢巻、手甲、脚絆というものものしいいで立ちの、一目でヤクザとわかる風体の男共が、腰に長いやつをぶちこみ、手に六尺棒をひっさげ、まっしぐらに走って来るのである。およそ十人ほど。

若者は無邪気におどろいた顔になり、やりすごすために、堤の上に一筋ついた細い道のわきに寄った。

男共は息せき切って、男くさい汗の臭気をまき散らしながら、次々に走りすぎて行ったが、一番あとから来たやつが、

「邪魔だ！　引っこんでろ！」

というや、いきなりからだをぶっつけた。

若者は身をひねって避けたが、夏草に足をとられて、ずるずると二、三尺、堤をすべりおちた。ころげはしなかったが、ころげるばかりによろめいた。

「無礼者！」

釣竿と魚籠をふりすてると、さっと堤を走り上った。相手はもう四、五間も向うを走っていたが、忽ち追いつき、帯をとらえたかと思うと、そいつは土手の下にふっ飛び、深い夏草の中に足を空にしてもがいていた。

「何をしやがる、土百姓め！」

あえぎあえぎさけんだなかまの声に、皆足をとめてふりかえったが、急には何がおこったかわからない。

「伝助！　何してんだ？」

夏草の中にやっと立ち上った男はさけんだ。

「そこの土百姓が、おれをここにほうり投げやがった。水戸の手先にちげえねえぜ！」

「水戸だってえ？」

男らはさっとかえって来た。

「やい！　てめえ、いい度胸だね。一人でおいらッちに喧嘩を売る気かよ」
若者はおちついている。
「喧嘩はそっちが売ったのだ。わきによけているおれを突きとばそうとしたのは、あの男だ。そっちがわびればよし、でないかぎり、一人も通さんぞ」
「生アいうな、若僧め！　おいらッちが誰だか知っての上での、そのごたくか。おいらッちは、東金の与兵衛親分の身内だぜ」
「東金の与兵衛がどうした？　たかの知れたバクチ打ち、お前らはその三下だ。ちっともこわくないぞ」
子供のような顔でいながら、不敵なことばだ。相手はかっとなった。
「野郎！　ほざくな！」
六尺棒をふりかざし、なぐりかかった。若者はさっとふみこみ、棒をわきに流し、男の手首を手刀で打った。軽く打ったようであったが、おそろしい力であったのだろう、相手は棒をとりおとし、打たれた手首をおさえてうずくまった。
「野郎！」
次の一人が棒をすて、脇差を引きぬきざま真向から斬ってかかったが、その時には若者は棒をひろいとっていた。びゅーとうならして足をかっぱらい、もんどり打たせて、土手下に転落させた。
「しゃらッくせえ！　たたんでしまえ！」

のこりの七人は一せいに長脇差をひきぬいた。さすがに喧嘩なれている。三人は土手下におりて、背後にまわろうとする。若者はあわてない。片手に六尺棒を立て、ゆっくりと竹の子笠を捨て、腰の手拭で顔の汗を拭いて、笑いながら言う。

「おい、お前ら。そんな腰つきでは、犬の子一匹斬れはせんぞ。まるでなっちゃアおらん。おとなしく、わびを言って行った方が無難だぞ」

「肥桶かつぎめ！　くらえ！」

無頼の剣法だ。相手の強さがわからない。また斬りこんで来たが、手もなく刀をはね飛ばされ、本人も土手下へころがって行った。

次の一人も、咽喉もとを棒の先ではね上げられ、あおむけにたおされて、気絶した。

のこる男らはもう闘う気力はなかったが、さりとてなかまをおいて逃げもならず、真青になって、遠くから掛声をかけているだけであった。

そこへ、一挺の駕籠が来た。

二

駕籠には浪人ていの男が乗っていた。垂れをあげて、外をながめながら来たが、この様子を見ると、駕籠をとめさせて、おり立った。やせた、肩のとがった、頬に刀傷のある、目つきのけわしい二十五、六の男だ。ヤクザの一人が駆けよった。

「いいところへ、先生。あの若僧め、土百姓の風体をしてますが、たしかに水戸のまわし者です。

おッそろしく強えんです」

その男はうなずきもしない。ゆっくりと近づいて来た。つめたい目でじっと見て、少ししゃがれた、ドスのきいた声で言う。

「若い衆、おれの弟子共を可愛がってくれたらしいの。おれは武州熊谷の神道無念流秋山要介道場の師範代、岡村弥八郎だがね」

名のれば相手がひるむと思ったのだろうが、若者には少しもこたえない。

「そうかね。しかし、弟子のこいつらがこんな剣術を使うようでは、師匠のあんたの腕もさほどのことはなさそうだな。ほんとに秋山道場の師範代かね。バクチ打ちの用心棒というだけじゃないのかね」

「なんだと！」

刀傷のある頬がぴくりと動き、刀のつかに手をかけ、じりじりとにじり寄る。風がさわさわと音を立てて草を吹く堤の上に、殺気が流れ、急に薄暗くなったようであった。

その時、水門の陰の薄の中から、かわいた笑い声があがった。つづいて、

「よしなさい、よしなさい」

と声がおこり、土手に上って来た者があった。釣竿と魚籠をさげ、赤樫の木剣を杖についている。年頃五十くらい。黄麻の帷子に献上博多の帯をしめ、脇差一本さしているだけだが、鍛えを思わせる風貌であった。にこにこ笑いながら、ものやわらかに言う。

「あんたは後から来なさったので、事情がよくわかりなさらんようだが、わしははじめからそこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com